

この感能は物に接して起るので何人も最も明瞭に知つて居る。

眼、耳、鼻、舌、身、

色彩を眼によつて見、音響を耳にて聞き、香臭を鼻にて嗅ぎ、甘辛を舌にて味ひ、硬軟冷熱を皮膚にて感ずる。この五官の感能をば前五識と云ふ。

此の前五識は眼なり耳なり鼻なりが、それ自身の能力のみで感能するのであるかどうかは後の研究で明かになる。茲では五官の感能のあることだけを云つて置く。

さてこの外に意識と云ふ働きがある。常に云ふところである。我が國でこのところを働きの方面によつて三通りに別けて居る。

和魂、荒魂、奇魂、

である。印度哲學では意識と摩那識潜在意識とに別けて居る。

我國に古來この名稱は傳つて居つたが、どのやうな働きを斯く名づけたものか頓と明かになつて居なかつた。夫れと云ふのが、心といふ物が肉體以外に一つの塊か何かになつて在るやうに思つて居たものだから要領を得なかつたのである。荒魂はあらびたまふ神靈だとか、和魂にぎびたまふ神靈だとか解釋にもならぬ解釋で已むを得ず押つけて居つたのである。

こころの働きの二つから説明する。一つは親和の働きで一つは反撥の働きである。親和の働きを和魂と云ひ、反撥の働きを荒魂と名づけらる。この二つの働きは一見相反して居るやうであるがその結果は一つは親和融同であつて、一つは反撥同化であるので

落ち著く所は一つになる働きである。一は初めより融同を事とし
他は征服して己れに同化せしめようとするので、同化も融同も共
に渾一となるに在るのである。

これは働きの方面であるが、吾人のところには善悪正邪美醜等
を判別したり、また諸種の経験によつて知ると云ふ力がある。こ
れを奇魂と名づける。

人の賢愚、業績の大小はこの和、荒、奇、三魂の能力の強弱に
よつて別れるのである。魂とは其の偉大なる働きの名である。

歐米の分類法は妥當ではないが、強ひて之れを我が國の分類に
當嵌めて見れば

和魂情(荒魂意) 奇魂(知)

と見て見えぬ事はないけれどもこれは他の歐米の學術が外觀甚だ
整齊して居るのに比し甚だ粗漫な分類法である。

善悪正邪乃至美醜等を識別する働きは奇魂と呼ばれるが、既に
之れを識別して欲求なり、忌避の念なりが起れば、それは奇魂の
働きではなくて、更に別の名が付けられる。即ち

幸魂

と云ふのである。幸魂とは吾人の生命に關する力の名である。欲
求なり忌避なりは知識や感情の働きと云ふよりも生命系に屬すべ
き働きであることは見易き道理である。喜怒哀樂の如きも奇魂の
働きは軽く、和荒二魂より直ちに幸魂の方に傾いて居る。印度哲
學で阿羅耶識と云ふのがこの幸魂に近いやうである。

和、荒、奇、幸の四働が吾人心靈の總てかと云ふにさうではな
い。更に最高至貴の力がある。それは神直毘靈であつて、眞の靈
と云ふべきものはこれのみと云つてもよい程のものである。彼の
庵摩羅識、譯して眞如法性と云ふがこの力である。

和、荒、奇の三魂及前五識はそれ／＼其の働きに依つて別々に
名づけられたものである。宛かも内閣に於ける各省の分掌の如き
觀がある。幸魂は内閣總理大臣の如く、總てを統轄して生命の安
全を保維して居る。この以上に神直毘靈の在るのは、上に神聖不
可犯の天皇が君臨したまふが如きものである。

幸魂までは自己の觀念が旺盛であるが、神直毘靈に至れば宇宙
と一體で、自我の觀念は更にない。直に神の御心である。自我に

對して之れを大我と云ひ本我と云ふも實は解し易からしめんがた
めに立てた名目に過ぎない。

名目には斯くの如き區分があつて、各々部署が定まり厘毛も相
犯さぬやうになつて居るが、たゞさう名を立てたまでのことで、
物質でないからして、生理解剖の如くに之れが胃だ肺だと取つて
見せるものがないので甚だ便りないやうであるが、實は觀念によ
つてこの働きの一つ一つを休止させると其の能力が自然缺けてし
まふので容易に立證することが出来る。

肉體精神共に沈靜の位置に置き、こころの二つの働きの、即ち和
荒二魂の作用を全く休止せしめる。如何に休止せしめようとして
も何等の修業なしに全然休止することは困難である。まづ半睡半

覺位の所に成れる。それでどのやうな結果を來たすかと云ふに
 奇魂の働きが敏活となつて來て、所謂の潜在意識が働くやうにな
 る直接事物に接待すべき和荒二魂の分掌が缺けて居るから幻覺錯
 覺を交生する。經驗や判別を司る知の能力が旺盛になつて何故幻
 覺錯覺を起すかと云ふに、これは現實と直接交渉すべき二つの能
 力が減殺せられて居るから生ずるのである。

催眠術上に於ける状態は略々この状態である。水を與へて酒な
 りと云へば酒の味ひを感じ酔を催す。ここで考ふべきは五官の官
 能が五官それ自身のみでは完全なる働きをしないと云ふことも知
 れる。即ち奥のところが酒なりと思へば五官は酒なりとして受け
 入れるのである。和荒奇の三魂が均勢を保つて働いて居れば間違

ひは起らぬが、其の平均の破られた場合には立ろに間違ひが起る
 この間違ひを利用し善導して催眠術の應用治療や諸種の精神療法
 が行はれるのである。

全生命力である幸魂の能力も、これを休止することに由つて却
 つて明瞭となる。

今予がこの腕に三目錐を指す。指す前にこの錐をさしても我が
 肉が微しも破れない。破れたやうに見えてもそれは本當に破れた
 のではない、細胞の間を上手に分けて通るのだから驚く程の事は
 ない。痛くはない。血も出るには及ばぬ。白血球などを差し向け
 るには當らぬと十分觀念をして針を指す。さうして指した錐を抜
 いて見る。素より血も出るに及ばぬと觀念してあるから血も出ず

痛くもない。血の出るのは生命系(幸魂)に分類される働きである。白血球も夫れと同一なる運動である、即ち幸魂の働きである。今は前以てその働きの不必要を觀念しよく／＼申聞けてあるからその騒動がなくなつて済んだのである。

この反對に幸魂の注意を喚起して置くと、火も何もついて居ない煙草の、しかも吸口の方をこの腕に當てる、火がついて居て熱いぞと觀念して生命系の注意を喚起して置く。熱いと觀念してあるから生命系は其處を守る必要が起る。随つて血をこゝに集中する。やがては白血球をさし向ける。直ちに赤くなる數分の後にはこゝに火腫が出来る。

これが幸魂の分類の因由となるのである。疾病は其の種類多様

であるが、今の所では素質の變化若くは外界よりの障害を除けば悉く皆血液循環の良否に由ると云ふの外はない。有毒素に對する抵抗も血行に伴つて起るので、その順調を計れば疾病は除去せられる。血行の不調なり缺陷なりが疾病の原因であるから、その不調の部分に或る力を加へて疏通せしめ順調を期し得るならば疾病の根元は除かれる。而して猶痛傷があれば、和荒兩魂の働作を休止して、奇魂の力を増大にし所謂潜在意識によつて痛傷を去り幸魂の休安を求めたならば立ろに疾病痛苦より脱離することが出来る。

神直毘靈の存在は常識を超越した時に其の靈光を直覺し得るので、この力は靈知であり、靈能である。和荒奇幸の自己意識の減

殺若しくは滅却によつて自からこの神靈の光彩を認識し得る。

この心霊上の研究の歸趣は容易に靈魂の滅不滅論を解決すると思ふ。

疾病と暗示及醫藥と無暗示

一般の精神治療——催眠術・心霊治療・哲理治療・靈理治療・氣合治療など諸種の分派があるが、その根本は共通で、暗示に依つて疾病の痛苦から脱離せしめようとして居るのである。施術者の努力によつて被術者の精神の一部を左右し、疾病は一種の迷想が生じても

のである『其の病ひは既に治癒した、其の證據には今痛くないだらう』『これから今の如く必ず痛くない』とか云ふ暗示を興へる。この子供だましのやうな處が精神治療の身上である。

平素相對で言へば腹の立つやうな、子供だましの言葉が、何故效能があるか。それには是非とも被術者が施術者を信頼すると云ふ事が必要條件とせられて居る。この施術に依つて疾病は必ず治るものであると信じなければならぬ。例之さうまで信じなくとも施術者その者をば信じて居なくてはならぬ。

「鯛の頭も信心から」で、信ずると云ふ力からして、精神が既に危懼の念より脱れて居る。この力が肉體に及ぼし、茲に疾病が治癒するのである。人間に神に對するが如き信を繋けると云ふこと

は、容易に出来ないやうであるが、『苦しい時の神頼み』病苦より脱れたい一心の所へ、幾多の實例を聞かせられ、それに依つて術其のものを信じたり、施術者の尤らしい言動や、更に幼稚なものに對しては風采などからして一種の信を起すことは、割合難しい事ではない。信が起ればそれが力となつて暗示を受納れるやうになる。これを受納れば直に效能が顯はれるのである。

暗示に依る療法は、施術者そのもの、單純な力で疾病を治療するのではなくて、被術者の衷心から起して來る『信』に依つて疾病を脱れるのである、故に心靈とか精神とか云ふ神祕的文字で、無間に人間離れのした行爲の如くに云つて居るものは別として、秋山命澄君のやうな眞面目な研究的態度を持つて居る人は、自ら

「術若くは施術者の力で病氣は少しも治るものでない。被術者の自力で治るのである」と常に告白して居る。全く其の通りで、暗示を受納れない患者は幾ら施術をしても兎の毛程の效能もないのである。

二

疾病に對する暗示の效能は、恐ろしい程偉大なものであるが、特に疾病治癒に關する暗示を用ゐずとも、『信』の力は絶大の働きを顯すものである。昔能近一君——神田錦町に開業して居る醫師——は予の知る醫師の中で、現今只一人の親切な、そして研究心に富める殆ど理想的の醫師である。大抵の病人が一度見て貰ふ

と、もう菅能先生でなくてはならぬ。菅能先生に掛つて病氣が治らなければ、どんな治療をしても治るものでないと思つてしまふ婦人や老人は殊にさういふ思想になる。菅能君は病の原因から、現在の病氣の性質、之れが治療法等を、患者の知識に應じて、嚙んで含めるやうに説き聞かす、其の熱心其の親切は、患者より絶對の信任を得ることになる。老人などは病氣の時に、菅能先生が見えたと云へばもうそれだけで見て貰はない前に、ずつと氣分が違つて来る。

故人の青山博士なども幾分此の氣味があつた。日本第一の醫者たる青山博士の診察投薬、それが患者に偉大なる安心を起させると共に、博士の人格學識に信賴するの念を伴ひ、随つて同じ藥でも青山博士の處法は並々ならぬ效能があることになる。總ての醫師が菅能君の如く、又は青山博士の如き信賴を贏ち得るならば、それは誠に結構な事であるが、全國四萬六千の醫師に之れを望んだ所が、それは行へない事である。

三

暗示を屢く受けると感應性が敏捷になる。感應性の敏捷といふことは、之れを他の一面から觀れば、自己の意思が他に征服せられることになる。人格の蹂躪である。次第に敏捷になるのは意思が漸次に薄弱になることを立證して居る。意思が薄弱になつて良からう筈はない。一時その性の利用によつて疾病を治癒すること

が出来たとしても、暗示の敏感から病氣を背負ひ込むことも亦甚だ多くなる。此の事は予の一家言ではなく、催眠術の大家として有名なる前成田中學校校長竹内楠三君も既に「眠催術の危険」なる著書を公にせられて力説せられ、暗示感應は諸種害惡の源であるとまで極論せられて居る。意思にして薄弱となれば其の精神は健全であるとは云へぬ。吾々は何處何處までも鞏固なる意思、健全なる精神を求めなければならぬ。然るに暗示感應に依る療法は之の要求と全く相反して居る。一體疾病は不健全即ち一部の力の缺陷、若くは變調より生ずるのである。この缺陷補充か、變調を順調に轉換することかによつて治療さるべきものである。故に何か此所に誘導する力の療法がなくてはならぬ。

四

暗示は病氣を治す、同じ道理で病氣に罹りもするのは誠に當然の事であるが茲に最も驚くべきことは、現代の衛生思想なるものが悉く發病暗示であることである。

内務省衛生局の藏版で、特に衛生思想涵養資料の文字を冠し、『肺結核及消化器性チブス赤痢虎列刺等傳染病蔓延系統圖』と題する書物がある。この書物は一々繪で以て説明してあるが、これを文字で紹介すれば、大要下の如きものである。

第一圖 家庭に於ける傳染 接吻や箸の混用や食物を噛んで喰はせるのは、可愛い小兒に毒を與る様なものです。圖解

繪一、小兒に物を嚙んで與へる繪 二、小兒に接吻の繪 口元に
に微菌の移動を圖示してある。

第二圖 泡沫に因る傳染、病人と對座する時は三尺以上離れない
と微菌を含んだ唾が飛び付きます。教師が肺病だと多數の生
徒に傳染します。圖解

繪一、對談中に瘦せたる人の口より微菌の飛散する繪 二、學
校教室で教師の口より微菌の飛散する所。

第三圖 家屋に因る傳染 他人の住んだ家へ移轉す時は十分消毒
して入りなさい。圖解

繪一、病人の居る家、疊及襖の引手等に附着したる病毒を圖示
し、二、かしやを捜して居る夫婦、三、求めたるかしやに入

りやがて病人となる繪。

第四圖 寢具に因る傳染 他人の使用した寢衣や枕、蒲團の覆は
危険から洗濯したものに取換なさい。圖解

繪一、前夜旅館に宿泊したる肺患者。各所に微菌を圖示す。

二、後に其處に泊つた客が病毒の附着せる蒲團を著て居る。

第五圖 古著に因る傳染 古著は消毒してから使用なさい。圖解

繪一、大患の婦人、二、婦人の衣類古著屋の店頭を飾る、三、

娘に母親が購ひ來れる衣類を装はず、四、娘へ傳染。

第六圖 器物に因る傳染 吸付煙草を貰ふたり、古本を借りるの

は危険です。杯の獻酬はやめるがよい。圖解

繪一、老婆の吸付煙草、二、酒宴、三、貸本。煙管、杯、本に

微菌の附着を圖示す。

第七圖 塵埃に因る傳染 人の群集する處には唾壺を置きなさい。

唾壺以外に唾を吐く者は公德心のない者です。圖解

繪、會社及停車場等の屋内に咯出せられたる結核菌飛散の狀、

咯出されたる唾は忽ち群集に蹂躪せられ塵埃と共に飛散し

多數人の呼吸器を襲ふ状態。

第八圖 流水に因る傳染 流れて顔を洗ひ口を嗽ぐのは痰や微菌

を呑む様なものです。圖解

繪、川上にて肺病患者の用ゐたる唾壺を洗ひ、其の病毒の流下

する所にて洗面及び含嗽を爲すの狀。

餘り諄いから此の邊で留めて置く、大抵これでどんな繪があつ

て、どんな事を教へてあるかは推察し得るであらう。扱之れに依つて教へられたことが、どのやうな暗示となり、如何なる感應を起すかと云ふと、下のやうな事になり、この知識が呪咀すべき發病暗示となる外、さしたる效能のない事となる。

何だか咳が出て苦しい。どうしたのだらうと思ふと、昨日瘦せ衰へた肺病やみらしい人と永い間對談した。日外本で見たやうに事に由ると彼の人が肺病患者でそれが傳染したのではあるまいか。かう思ひ出して來ると、急に肺病のやうな氣がして仕方がない。咳が氣になればなるにつれて咳が澤山出る。肺病の時は熱が出るとの事であるが、夕方に發熱しなければよいがと、心配をして居ると日の暮に熱がする。嗚呼愈々自分は不治の難病にとつつかれ

疾病と暗示及醫藥と無暗示

たと、何でも咳を肺病にしてしまふ、第二圖
 移轉して來てから、何だか身體の工合が悪い。方角が悪いなど
 云ふ人もあるが、それは信ぜぬとしても、何日か見た本にあつた
 やうに、この宅に以前肺病の人でも住んで居たのではあるまいか
 何うもそうに違ひない。それで傳染をしたのだ。あの時消毒をし
 て這入れればよかつたのに、急いだものだからとうとう取り返し
 のつかぬ事にしてしまつたとなつて肺病を作り出す。第三圖
 旅行をして咳をすれば旅屋の蒲團、古著を買へば、杯を貰へば、
 流川で手拭を洗へば、一一あゝあの時に若しか微菌がとなつて來
 て會て見た本のことを思ひ合し、鼻風邪位のことを肺病だと信
 じ、その心より病氣を造る。

五

衛生思想の多くはこの通りで、腹が痛い。どうしたのだらう。
 昨夜の御馳走の中に若しかとなれば、腹が愈々痛んで來る。若し
 か若しかの恐怖心から、會て見た本に思ひ合し、病氣を造つてし
 まふ。これで最近に適切な一例がある。
 予が友人に會て醫學雜誌の編輯に従事したので、醫療の事を可
 なり心得て居る人がある。この人は人間一日の食料は何カロリー
 なくてはならぬ。今日はまだ少し足りない。これを食べては食べ
 過ぎると、まるで人間の生命を機關の運轉のやうに考へて居る。
 今日は氣温が何度であるからこの著物でよい。夕方には氣温が降

疾病と暗示及醫藥と無暗示

下するから今一枚襦袢を著なくてはならぬ。吹吐が一つ出ても、先に何々を食べたので、消化が悪いのだとて、人工加兒々斯泉鹽と撒里矢爾酸、含糖百弗聖、ヂヤスターゼを調合して飲む、子供が頭が痛いと言へば直にフエナセチンを飲ますと云つたやうな調子で生活をして居る。この位の注意をするのに、この家では病人の絶間がない。五人の家族で一人二人は常に薬餌に親んで居る。「これではどうも遣り切れない」と云つて零す。予が「それは自ら病氣を製造して居るのだから仕方がない」と云ふと、「そんな事はない。この位の注意して居ればこそ、皆今日まで生きて居るのである。若し君達のやうに亂暴な生活をしたならば、一日で終してしまふ」などと云つて居る。先頃も六歳になる一等末子が大層

な熱で、腸窒扶斯ではあるまいかと云ふので、博士學士を四名も聘んで見て貰つたが、どうも病の性が知れぬ。三日も四日も神識喪失のまゝで騒いで寝ない。百計萬策盡きて、日頃餘り信じて居ない予の施術を頼んで来た、子供は予の施術に依つて噪狂も鎮まり、睡眠も取るやうになり、熱も漸次に降下した。この病中に他の子供は一切病兒の部屋に入れぬ。若し這入ると急度傳染すると云ひ聞かし、其の部屋の内の器物にも觸れてはならぬと嚴重に云ひ付けた。十一になる兄の子は弟の病苦の状態をよく見て居るので、怖れを抱いて感心に近よらない。所が或日何かの拍子で病兒の部屋の簾の尖が頭に觸つた。それで病氣が傳染りはしまいかと云ひ出した。夕方には弟の苦んだ通りに腹が痛いとして苦悶き出し

た。その夜は夜通し寝もせず苦しんだ、此やうな事で傳染する筈はないのであるが、餘り大事を取つて精々嚇かしたので、それが發病傳染暗示となつたのである。

斯くの如き結果を來たすのが、今日の衛生思想である。傳染病蔓延系統圖には、後藤男爵が「國運進展之基在于國民衛生思想之普及」と題して居られるが、衛生思想の普及は全く反對の結果を來して居る。知らなければ僅かな事で済んだものを、慙ひに知つて居つたがために、餘計な心配を起し、それが病氣をあらぬ方に導き、若くは重態に陥れるのである。

國運の進展を希はば、所謂衛生思想を呪咀しなければならぬ。如何なる障礙にも抵抗する力を養成するために、飽くまでも積極的の思想を吹き込み、身體壯健であれば病氣に罹るものでないと云ふ考へを普及させねばならぬ。

六

予も疾病治療に暗示を用ゐることの有効なることを認めるけれどもそれには意思の薄弱化と云ふ取り返しのつかぬ弊害があるのだ、之れを斥けねばならぬ。現在の衛生思想なるものは發病暗示である。此の思想を打破して、眞の體力の増進を計らねばならぬ。其所で醫術なるものを瞥見すると、是また甚だ頼りないものである。

醫者は精神治療を迷信であるかの如くに侮蔑して居る。精神治

療の根據は暗示感應で、其の理由は甚だ明白であつて、決して迷信ではない。其の點から行くと、現代醫術の方が更に不完全なものである。一體今日の醫藥なるものは如何にして發見されたかといへば、希臘人の迷信に起原して居る。希臘人はアクスビオスと云ふ神様が人間の病氣を治して呉れると信じて居つた。それ故病氣になれば、この神に祈願を籠める、すると其の病氣に對する藥物を夢で告げて呉れる、何の木をどうして飲めとか、何草の葉の汁をつければ治るとか御告がある。それで疾病が治癒すれば、御禮詣りをして、治病の因由御夢想の次第を書き記して神殿に納めて感謝をすると云ふ習慣であつた。この時ピボクラテスと云ふ伶俐な男があつて、この神殿の記録を整理して、神藥の比較統計を

取り、この草がこの腫物に效能がある。この木の實が何病に特效があることと云ふことを經驗の示す數から割り出して來たこれが、西洋醫術の起原である。それが多少の發達をし、其の後に野蠻人や禽獸から習つたもの等も澤山に出來て來て今日の醫藥を形づくつたので、其の根柢は經驗といふ事以上には出て居ない。如何なる藥物は其の飲用に依つてこれこれの反應作用を起し、それで疾病に如何なる影響を與へると云ふやうに、理由の説明の出來る藥物は殆どないと云つてもよいのである。迷信に根ざしたる經驗これが今日の醫術の根柢である。是れに貴重なる生命を托すると云ふ事は危険ではなからうか。

藥物治療は今や其の末期に際會して居る。吾等は迷信を遵奉す

る程無自覺では居られない。即ち彼の理學的療法が非常な勢力を以て進展して來て居るのもそれがためである。

七

醫學は何を研究して居るかと云ふと、殆ど病氣の搜索發見に没頭して居る。發見誠に結構である。全く不明であつたものゝ系統を考へたり、從來大まかに區別されて居つたものを更に細かに區分して、その一々の症狀に對して特殊の名目を附するとか云ふことは進歩したる科學の賜である。

翻つて考ふれば、人は百人が百人、萬人が萬人同じ調子のものではない。予の體溫、予の脈搏は必ずしも友人と同じでない。既

に體溫脈搏に於いて相違して居れば、全體の機關も悉く同じではない、特異のものである。特異のものに多少の變化があつた時に、もともと數から割り出した醫學の權威が認められようか、餘り細かに別けて行くと人一人一人に其の醫學がなければならぬことになる。かうなつては醫學は求めて疾病を製造するものに外ならなくなる。

人間に限らず生物には一體環境に順應して行く所謂順應性と云ふ偉大な力を持つて居るから、今日の醫學で考へる程心配なものでは決してない。醫學は今日尚ほ病の撲滅を講ずる所まで進んで居ない。未だに病の發見製造をして居る。肉體の健康を計ると云ふことを研究せずして、健康の損はれた方のみを研究して居る。

疾病と暗示及醫藥と無暗示

消極に向つて膨脹するものは依然缺陷である。國民の健康を向上せしめんとせば、其の自然の性情の通りに積極に向はして置かなければならぬ。此の點に於いて醫學も醫術も衛生學も悉く其の揆を一にして居る。捕ひも捕つて消極的である。隨つて疾病暗示を與へそれを増長さして居るのである。

八

予は茲に暗示感應を度外し、藥物をも用ゐずたゞ生物自然の力を以て、力の缺陷を補ひ、變調をば順に導くことが出来ねばならぬと信じ、之れを各種疾病に試みて、意外の好結果を得たので、調精術と命名し、世に問ふことにした。其の物理的療法と云ふの

は信仰、暗示、機械藥物等の力を假らず、たゞ生物自然の力のみ依るが故である。

力の交換

文覺上人が荒行をしたと云ふ話がある。夏の熱い時に素裸になつて、幾日も幾日も晝夜の別もなく、藪の中で座禪をくんだ。藪の中に素裸と云へば、大層涼しさうであるが、蚊、蛇、蜂などの多い時の事であるから、暫くの間は總身、蓑を著たやうにこれ等の毒蟲がたかる。幾ら集つて来て血を吸うたとして、殺生は最も忌む所であるから、之れを殺すなど云ふ事は出来ない。夏の接心は雨安居又蟲安居と云つて、出歩けば蟲虻を踏んで、思はぬ殺生を

するにより、静に座禪をするのであるとも云ふ程であるから、自ら行を修めながら、之れを殺すなど云ふことは思ふさへ許さない。如何に痒からうが、痛からうが、それに頓著せずに向に心を静める。之れがこの修行の目的である。

文覺上人は寒中には那智山に參籠をして、あの清冽な瀧水に打たれて修行を積んだ。初めの七日で凍死してしまつた。それが不動明王の靈顯によつて蘇生し、尙も三七日の行をしたと云ふ。

この様な荒行を何のために修したか。單に外部から來る所の有らゆる障碍壓迫にもおめず臆せず、確固不動の所に樂々と安住して居ることの出来るやうに平素から鍛へて置くといふ目的も無論あらう。けれども單にそれだけならば之れまでの難行苦行をしな

くても濟みさうに思へる。けれども文覺上人にはどうしても荒行をしなくてはならぬ譯がある。この荒行を我が調精術より見れば力の交換であると説くのである。

力の交換とは何ぞ。或る力を他のより大いなる力を假りて誘ひ消す法である。

まづ文覺上人の説明から試みて、二三の他の例に及ぼさう。

文覺上人の出家前は御承知の通り、遠藤武者盛遠と云つて上西門院北面の下薦であつた。この男の叔母に奥州に縁づいて往つて居つたことのあるものがある。奥州に往つて居つたので衣川殿と人が呼んで居つた。その娘、即ち盛遠がためには従妹に當るものに頗るの美人があつた。衣川の娘といふので人が本名を云はずに

袈裟々々と呼んで居つた。この袈裟は同じ親類うちの渡邊源左衛門丞渡と云ふ者に嫁した。盛遠はこの袈裟に想を懸けて居つたので、既に渡の妻になつても忘れられない。其所である時叔母を強迫して袈裟を奪はうとした。叔母も大に閉口をし、亂暴者の盛遠に思ひ込まれては只では納まらぬ。困つたものだと案じ、娘を呼んでどうしたものだらうと相談をすると、若い者は開けて居る。御心配には及びませぬと引き受けて、盛遠に會ひ扱て云ふには、「渡と云ふ者があつては所詮末々まで添ひ遂げることが出来ぬ。そなたの武勇を以て渡を無き者にし、その上で二人が心安く夫婦とならうではないか」と云ふと、盛遠俄に色男になりすまし大いに喜んだ、袈裟は尙も語を繼ぎ「渡は斯く斯くの部屋に、かうい

ふ姿で寝て居る故夜の何時にこれくの木戸から忍び込んで首尾よく本懐を遂げて呉れ」との事であつた。盛遠勇躍して喜び勇み示し合した通りに忍び込み渡を打ちおふせ、首をば風呂敷に包んで持ち歸り、何喰はぬ態で、夜が明けたならば、戀の叶つたお禮參りに二人連れて出掛けようなどと思ひながら寝て居ると、郎黨が一人やつて来て「不思議な事もあればあるものである、日頃何の怨みも受けよう方のない源左衛門丞殿が女房、今夜まだ宵の中に無慙にも何人にか斬り殺された」と告げた。盛遠驚いて己れが斬つて来た首を出して見ると、渡にあらずして、それが幾年戀ひこがれて居た袈裟である。女はとても並々の事では納らず親類仲で血の雨を降らすやうな事があつてはならぬ。自らだに亡くば其

の禍ひを免れると思ひ、その身を進んで亡き者としたのである。盛遠その首を見るや身も世もあらず歎き悲しみ、遂に出家をした渡も叔母もこの機会に様を變へたと云ふ。

盛遠弓矢打棄て剃髮染衣の身となり、名も文覺と改めたけれども慙愧悔恨の痛苦は容易に脱離することが出来ぬ。其所で千思万考を回らして荒行にと取りかゝつたのである。心の痛苦を免れんがために、求めて肉體の痛苦を受けるのである。實在する肉體の痛苦によつて、無形の心の痛苦を脱れようと云ふのである。若し文覺にして心身の修養が立派に出来上つて居れば、荒行は全く無用の事である。何となれば悔恨も自己肉體から起つて來る一種の働きて、もともと自己を離れて存在しないものであるから今一息

彼に學問があつて此の所まで悟入して居つたならば荒行に依らずとも轉換法は行へたであらう。彼は其所まで悟つて居なかつたから荒行によつて交換法を行ひ其の目的を達したのである。

今この力の交換法の應用について一つの例を擧げよう。

茲に一人の精神病者がある。精神病者の常として心氣鬱結し、見る物聞く物が氣になる。氣になるけれどもこれぞと取り留めた考へも起らない。便通は秘結して幾日もなく、睡眠も更に取れない。食物も食べれば食べられると云ふまで、味ひは全くないと云つたやうな調子で長く煩つて居た。所が何日何處で傳染したか其の當時流行して居た虎列刺病に罹つた、發熱がし下痢激しく弱り目に祟り目、早もう己れはこれ迄と思ふ程であつた。虎列刺に對

する醫療を受け、數日の後にこの方は治つた。すると不思議な事には先の精神病も何處へ往つたか全く行方不明になつて了ひ、餘後の手當によつて體力も復舊し、再び健康體に返つた。

是れはどうであるかと云ふに、初めは精神病といふものに自己の全力を注いで居る。故にこの病氣は益々増長して來た。其所へ急激に靦面に目に見える體質上の疾患が新に起つた。もう精神病の方の事は構つて居れなくなつて、忘れるともなしに餘儀なくせられて其の苦痛から脱れ、新しい病氣の方に氣を取られてしまつた。其の新しい病氣といふのは、微菌の一時作用であるから一定の時間を経過すれば容易に治る。この新らしきもの、撲滅が出来るまで、古い方の疾患は全く念頭になかつたので、其の間に

自然の回復力が起つて鎮靜してしまつた。恰も虎列刺病に依つて無意識の中に、力の交換が行へたので、茲に目出度健康を全うすることが出来たのである。

若し茲に性の悪い胃腸病を煩つて居る人があるとする。諸種の療法も更に效が見えず二六時中青い顔をして腹を氣にして居る。此の人に人為を以て一時的に發熱をさす、常ならぬ大熱に驚いて、胃腸の苦痛を忘れ、熱の苦しみと恐ろしさとの外、何の餘裕もなくなる。熱は人為的に故らに加へたものであるから、自然に放散して平熱に復する。すると長い間の病で不治と思つて居た胃腸の症狀も更に痕跡を留めなくなつた。このやうな療法は當然行へるものである。調精術の應用治療には既に之れを用ゐて居る。

現代非常に進歩したりと揚言する醫術に於いては此のやうな方法は餘り行つて居るやうに聞かぬのは遺憾である。

灸治療法は筋肉の一部に刺激を興へて覺醒を促がす療法であるが、一面にはこの力の交換の原理も含んで居る。惱みのある時に急激に一時的の痛傷を人為的に肉體に加へ、其の惱みを鈍らすのである。

人為的に苦痛を加へず、寧ろ快感を起さしてこの交換法を行ふことも出来る。演劇の好きなものが、頭痛のする時に演劇観に行つて頭痛が去り、酒飲みが何の病氣でも、仲のよい飲友達と一杯酌み交せば必ず治ると云ふのがそれである。

更にこの原理を知つて應用すれば、一切他物の力を假らずに交

換法を行ひ得るやうに至るものである。それが他物の力を假りて居る間は未だ堂奥に上つたものではない。我が調精術を學んだ者は何人も必ず至極容易くこの力の交換が行へるやうにならねばならぬ筈である。而して之れが容易に行へるに至つて我が調精術は大成したものであると云へるのである。

調精術

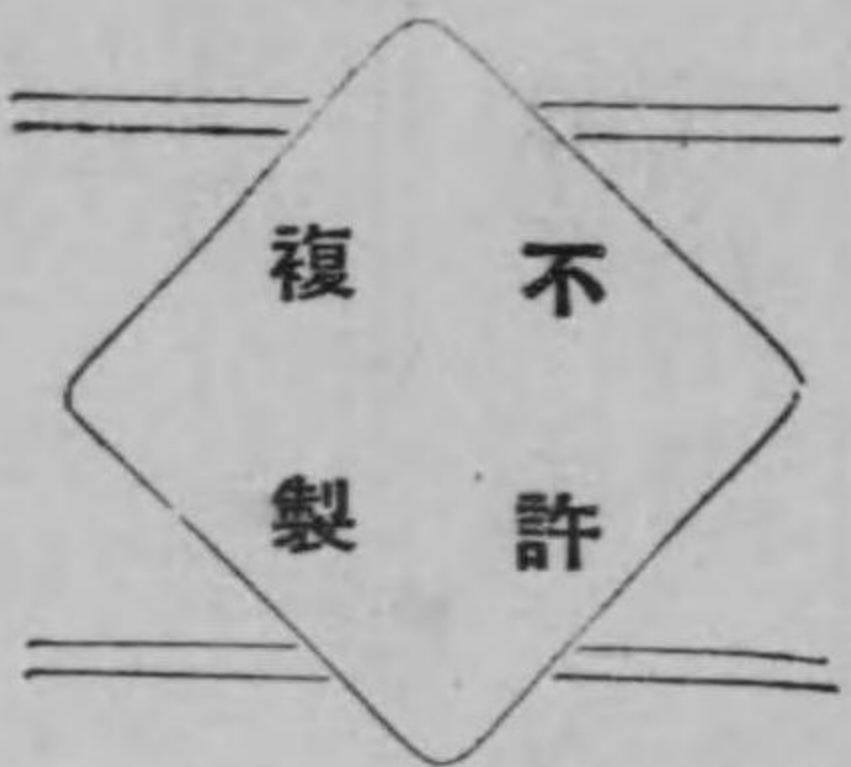
大正七年十一月七日校了

森田義郎

100

調精術 大尾

大正七年十一月十五日印刷
大正七年十一月十八日發行



發行所

東京市麴町區
山元町一丁目三番地

著者

發行者

印刷者

印刷所

定價金壹圓五拾錢

森田義郎

東京市芝區南佐久間町二丁目八番地

仲摩照久

東京市麴町區山元町一丁目三番地

加藤保

東京市本郷區丸山福山町六番地

文明社印刷所

東京市神田區三崎町三丁目一六番地

電話本局三三二六番

調精術普及會

電話東京町二二四〇番

調精術創始者 森田義郎先生著

調精術 應用術 氣合術

印刷中
全一冊

瞬間可能
護身と征服

體力の増進
金剛力の出し方
膽力の養成
不動金縛の法
思索力の敏捷
打身切創の手當
記憶力の發達
疾病の治療

第一編前論第一章人生の目的

自殺——人生の目的——生物の目的——松村博士の死と生
講話——動物學より見たる生物の目的——死と生
生命の再生——子孫——生命は生命より——泥炭中の運實
養生——生命の所在——力——病原菌の種類——次の世界は細菌の世界——
病——日光——腹痛——佐藤順天堂病院長の談——二人の患者——重患全治——輕症死亡——精

内容

第二章生命の安全

睡眠——愉快——食慾——便通——
血行の一元——温度——
輕症死亡——精

の一般 ▶ 『調精術』の姉妹編

神の疾病 | 第一編本論第一章健康の保全 | 健康保全と體力増進 | 醫
 予の實驗 | 體力主義の高唱 | 第二章體力増進法 | 精神の健全 | 肉體の健全 | 吾人は積極
 に | 體力主義の高唱 | 第一章體力増進法 | 體力の養成 | 思索力の敏捷
 | 記憶力の發達 | 征服力と親和力 | 第三章體力増進法の理論 | 博士
 氣食法 | 反息法 | 行水法 | 内觀法 | 呼吸法の種類 | 其
 の腹式呼吸と氣食法 | 氣食法の生理學的説明 | 呼吸法は自然體なり | 第四章氣合
 術 | 行水法 | 生理學的説明 | 水の威力 | 内觀法は自然體なり | 其
 體力増進法の屬行 | 天與の特典 | 大希望 | よく一口に四十里 | 百貫の石を擧ぐ | 物我
 氣合の方法 | 心も身も融け合ふ | 鍛治屋の槌植木屋の鉄 | 全精神全肉體の力 | 物我
 一川の境 | 氣合原理 | 第三編應用第一章體力増進法の應用 | 體力發
 競争必勝法 | 思索法 | 試驗應 | 第二章氣合術の應用 | 金剛力の出し方 | 不
 用 | 記憶法 | 本一冊の暗記法 | 第二章氣合術の應用 | 金剛力の出し方 | 不
 る強力者をも一指を動かさずして立ち竦ます | 第三章疾病治療法 | 自己療法 | 便秘 | 外傷 | 風邪 | 頭痛 |
 他人の疾病治療法 | 氣 | 第二編補說調精術の原理と其の概略 | 腹痛 | 便秘 | 肩の凝足の草臥 |
 合治療 | 調精術治療 | 第二編補說調精術の原理と其の概略 | 腹痛 | 便秘 | 肩の凝足の草臥 |
 時示の弊害 | 藥物の弊害 | 力の救ひ | 時代の要求

發行所

東京市麹町區
山元町一ノ三

調精術普及會

61
250

8.5.15

終